

Title	サン・シモンと「十九世紀科学的研究に関する序論」
Sub Title	
Author	小泉, 順三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.12 (1928. 12) ,p.1773(125)- 1812(164)
JaLC DOI	10.14991/001.19281201-0125
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19281201-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サン・シモンと「十九世紀科學的研究に關する序論」

小泉 順 三

「デューネーヅ住民の書翰」を書きつゝあつたサン・シモンの動搖し易い而も想像に富んだ頭腦の中には、既に、或る他の計畫が閃めいて居つた。即ち、サン・シモンはデューネーヅから獨逸へ行つてゐる。彼を獨逸へ行かせた直接の原因なるものは我々には不明であるが、彼の交際した人の中には二人の外交官である獨逸人があつた。而してこの二人の哲學思想はサン・シモンの有するものと非常に似通つて居つた。その一人と云ふのは、サン・シモンが投機をやつて居つた時に、彼に有限出資をして居つたが、其後、一七九七年以來、ふとした事から不和になつて居つた *Reber* 伯であり、他の一人はフランクフルト生れの *Ch. Et. Oelsner* であつた。Oelsner と云ふこの自由思想家のプロシヤ人は、フランスで暫らく生活して居つた事があり、且つ、セイエスの友人であり、その一生涯を *Islamisme* の研究に捧げた人であつた。サン・シモンが彼と相知るに至つたのは巴里に於てであつて、サン・シモンの語る所によれば、彼が中世紀の歐洲文明を研究した際に、アラビヤ人が科學の發展に與へた重要な學的貢獻を彼に教へたのはこの Oelsner であつた。この事は「人類科學の覺書」に於てサン・シモンが感激に満ちた筆致で述べてゐるのによつて我々は知る事が出来る。(註二)

或る獨逸の史家の如きは Oelsner はサン・シモンの名の下に公にされてゐる或る著書の筆者であると迄信じてゐる。但し、それには何等確たる證據があると云ふのではない。

然し、「それはあり得る事である。オーギュスタン・チェリイや、コムトの協力を利用した思想播種家は彼のために Oelsner をも亦、働かせたかもしれないのである」(註三)従つて、獨逸に於て、サン・シモンが會ひに行つたのは特にこの Oelsner であつたらうと想像されるし、又、サン・シモンは獨逸で、書いたり考へたりした事について彼に照會したらしい形跡があるのである。その眞偽は何れにしても、結局、この旅行はサン・シモンにとつてそう有益なものとならなかつた。それから、數年後に同じこの地を訪れたスタール夫人には甚だ多くのものを教示したのに、サン・シモンは何物も教へられてゐないと云ふのは甚だ不思議であるがこれは何に原因してゐるか云ふに、獨逸に當時流行して居つたものはすべて形而上學であつたのと、百科全書學者の弟子である、サン・シモンはこの方面に關しては何等教へられて居なかつたにもよるのである。後年「新キリスト教」に於て、新教徒の聖書研究没頭の弊害の一つとして獨逸に於けるこの形而上學的傾向を擧げてゐるが、彼は、この旅行から、その形而上學公式の下に潜んでゐるリアリズム、生れ出でんとしてリアリズムの蠢動してゐる事を卜知する明敏な觀察力を持つて居つた。獨逸思想の將來を豫言したこの簡明なる觀察は、スタール夫人の推測し得ない全然別のもの換言すればサン・シモン独自の活動であると云はねばならぬ。

曰く「余は、この國に於ては、一般科學は未だ乳兒の域を脱して居ないと云ふ確信と、其次には、

科學は未だ、こゝでは神祕的な原理の上に建てられてゐるといふ確信とを、この旅行から持歸つた。一般科學は未だ獨逸では幼稚であるが、然し、この大國民はこの科學的方面には熱心であるから、間もなく、一般科學は確かに大なる進歩をするであらう。科學は今迄よい道を發見しなかつたが、それが發見されば、完成されるであらう。そして、一度その道が發見されば、科學の成功は大なるものがあらう」と。(註三)

此れより數ヶ月前、アミアンの平和に際して、彼は馳足的の英國旅行をしてゐるが、この旅行も同じ様な——恐らく獨逸以上に彼を失望させた印象しか彼に與へなかつた様である。彼は自ら云ふ如く英國に於いて「何等重要な新思想の生れてゐる」のを見なかつた。彼は失望してフランスへ再び歸來したのである。

この時は恰も統領政治の末であつて、間もなく、フランスは帝政の世となつた。「フランス國民の幻想を捕へるために、三ヶ月に一度は何事かなさねばならぬ」と云ふナポレオンの意思を代表する軍隊は、その忠實なる召使として、外國に對しては實に光輝嚇々たる譽をもつて居つた。然し、その反面に於て彼が「政治の特長となる人類の全知識の富に對する根深い輕侮」は國民をしてあらゆる屈從の生活を甘受することを強制したのである。この状態はシャトウブリアンをして、想像も感情も起す術を知らぬと連呼せしめた。印刷は禁せられ僅かの手記や僅かのサロン雜誌が存在を許された丈であつた。物うき時代よと嘆ずる Boigne 夫人の美しい眉はいたく曇つて見へた。 Michelet は彼の幼時の追憶の中でこの當時の状況をよく書き残してゐる。

此の灰色に包まれた沈靜は奈帝國を蔽つた。彼の父は印刷屋であつたが、印刷屋は印刷屋として、思想家の運命の一部を分擔しなければならなかつた。そして Michelet の父も官憲の監視の下に置かれた自分の工場でつまらぬ仕事をしなければならなかつた。一年に二度か三度は外征軍の砲聲が巴里の眠を覺ました。人々は「又勝つたのか」とは云つたものの、熱狂して之を迎へる元氣は既に消耗して居つた。

サン・シモンは、かくの如く虐待されたフランスに、かくの如く騒亂に疲勞し切つたパリに居を構へて、忍耐強く自己の周圍を見廻した。

このころ、數人の彼の友人である共和主義者特に、大化學者の Condet は、北アメリカの國民に知識を分ち與へる様にと彼を招いたが、彼はその移住の價値を信じて居なかつたので出發を拒絶した。然し、何事かを求めて巴里に殘留したサン・シモンの豫想は謬つて居つた。

「統領政治のフランス、帝政のフランスに於ては、二千五百萬の人民の勞働と名譽とをすべてたゞ、自己のためにのみ要求する一人のシイザル丈にしか地位がなかつた」、共和曆第二月十八日の翌日の Sieyès の皮肉なる言葉を想起すれば、「諸君、我々はすべてをなすを知り、すべてをなす事が出来、而してすべてをなさんと欲する一主人を持つた」。誠に、この言の如く、ナポレオンは人民の數の多ければ多い程、より多く、人間の全權力、全希望、全熱情を吞込む人物であつた。従つて彼のうしろには恐ろしい空虚が、醸し出されて居つたが、社會の主として、又軍隊の首領としての彼は、この空虚を充たすに思想家を用ひるといふ様な事は決してしなかつたのである。サン・シモンが、ナ

ポレオンに對しては如何なる感情を抱いておつたかといふ事は確然と窺知出来ぬが、とにかく其壓迫は甚だ不活潑であつたので、彼には其拘束が痛みを感じさせなかつた程であつたらしい。然し、事實に於ては、大なり小なり、其壓迫も彼に變形して現れて居つたのである。

例へば、サン・シモンは或る時、彼の舊友の Monge を社會組織の問題について激させ様としたが、忠實な帝政主義者の Monge は「政治問題は余の關係せぬ事である。それ以上についてはボナパルトに余は任せる」と答へて遂に政治を議する事を回避した。これこそ、ボナパルトが常に人民を威壓し、人民をして阿諛か屈従か、何れか一つを選ばしめて居つた好例をサン・シモンは眼前に見せつけられたのだと云はねばならぬ。

この頃からして漸く貧困が、サン・シモンを疲勞させ初めた。何時頃から貧困が激しくなつたか正確な年月を定める事は不可能であるが、それは確かに一八〇五年と六年の間であつたと推定される。一八〇五年にはサン・シモンの破産は完全なものであつたと云ふ Weil は、次の如く、其貧窮にも彼が天才發奮の刺戟劑であつたことをよろこんでゐる。曰く、

「この時から、彼の生涯の最後の部分が初まる。そは、貧困に對する長い争闘に過ぎぬであらう。我々は、それを甚だ痛まぬ。若し、彼の奢侈欲と快樂欲とが常に、彼を満足させて居つたならば、恐らく彼は眞面目な著述を行ふことを求めないで財寶の中に埋れて居睡をしたであらう。貧困時代は彼にとつて、文學的に哲學的に生産時代であつた」と、(註四)さりながら、彼の貧困史をよむ者は、絶えず飢餓に惱まされてゐる不幸な思想家の生涯に一掬の涙を惜まぬ譯には行かぬ。

この間に於て、我々に知られてゐる事は、サン・シモンは、彼の衣服を賣る迄に落ぶれた事及彼が一八〇六年には彼のアメリカ戦争時代の友人であり、又屢、彼の食卓に饗應し且、宿泊までさせた事のある Louis Philippe de Segur 伯に援助を懇願したと云ふ事である。然し、サン・シモンの Segur 伯に對するこの懇願は伯爵に何等の感情も起させなかつた。サン・シモンは彼れから何の恩顧も受けずに、六ヶ月の間彼の返事を待つて居つた。そして、其結果、如何なる返事が來たかと云ふに彼はサン・シモンに一寫字生と云ふ甚だ貧弱な職業を投げつけたのである。

サン・シモンは彼の自敘傳に於て云ふ。

「セギユール伯は彼が余のために Mont-de-piété で一つの仕事を得たことを余に知らせて呉れた。此仕事は寫字生の仕事であつた。この仕事は毎日九時間の勞働で、一年千法であつた。余は六ヶ月の間其仕事をやつた。自分の研究は夜にやつた、余は血を吐いた」と。

血を吐いたと云ふのだから彼の云ふ如く「余の健康は最も悲惨な状態にあつた」と想像せられる。この時、彼は偶然幸福にも、彼が當時自分の友人であると呼ぶことの出來た唯一人の男に出會した。彼はうれしげに「余は一七九〇年から一七九七年まで余について居つた Diard に出會つた」と云つてゐる。この Diard は、サン・シモンに「御主人、あなたが従事して居られる地位はあなたの名にも又あなたの才能にもふさはしくない。御願ですから、私の家に御いで下さい。私の所有してゐるものをすべてあなたの御自由になさつて下さい。あなたの御心のまゝに研究して下さい。そうすれば、今までの補ひが出來ませう」と、舊主人に對する報恩の情を披瀝した申出をした。そこでサン・

シモンは、「この勇敢なる」男の申出を悦んで容れ、彼の家に住むことになつた。Diard はサン・シモンに、すべての欲求を熱心に満足させたばかりでなく、彼が印刷した著作の可成の費用まで出してやつた。

此著作が、サン・シモンの第二の著作である「十九世紀科學的研究に關する序論」であつた。一言にして云へば此著は「デュネーツ住民の書翰」の完成である。後者に於て、只、指摘したに止まる點をこの著に於て詳説して、サン・シモンは社會學に初めての雛形を與へた。故に、サン・シモンはコムトが受繼いで完成した近世的產物たる斯學の發明者であつた。そして、この書の動機をなしたのは、一七八九年以來科學のなした進歩、その今日の進歩状態、及今後の進歩の行はるべき方法の解説に就き、ナポレオンがフランス學士院に出した諮問であつた。彼は本書の序論に於て曰く「大ナポレオンの治世に於て、フランスはあらゆる種類の光榮に輝かねばならぬ。新王朝樹立以來、我が軍事史を書くためには、我々は『羅馬の筆に相當して居つた。然るに、我々の學派は何等新思想を生み出さなかつた。英國の科學的束縛は未だ我々の頭腦を押しつけてゐる。科學に於て主要なる進歩をなさしめやうとする皇帝の努力にも拘らず、我々は未だニュートン主義者である。皇帝は我々の知慧を鼓舞させた。彼は學士院に諮問を發した……」と、然るに、この重要な問題に對する學士院の返答は、多くの歴史的關係に分類されて大變よくは出來て居たが、總括的見解によつて統一されてゐなかつた。即ち「この返答は科學に、ナポレオンの進歩をなさしむる方法を呈してゐないのである」。然らば、如何にすれば、科學にナポレオンの欲求する如き進歩を與へること

が出来るのか。サン・シモンは稍狂熱して云ふ「皇帝は人類の科學的主領である、丁度、人類の政治的主領である如く。一方の手に、彼は確實な羅針盤を持ち、他方の手には、文化の進歩に反對するものを撲滅する劔を持つてゐる。彼の王座の周圍には、最も、武勇すぐれた大將のみならず、世界に最も有名な學者を列らねなければならぬ。ナポレオンを主と仰ぐ學派は、彼の指揮の下に、後世子孫の何人の手によつても同様のものが出来ない程の廣大にして壯觀な科學的大建築物を建てねばならぬ」と。

壯觀無比の科學的大建築物をつくることは「良き百科全書をつくり、デカルトによつて企圖された科學體系の組織を完成する事であつた。これこそナポレオンの見解にふさはしい唯一の科學的研究の目標であつた。かゝる見解の下に、サン・シモンは、「十九世紀科學序論」こそ、彼の皇帝に對する答になるであらうと確信して居つたのである。(註五)彼は本書を印刷にしたが公刊してゐない。彼は「自分の著作は決して賣らない。自分は決してそれを新聞で公表もしない」と云つてゐる。彼はそれを、少數の學者、彼の所謂「科學の進歩に興味を有してゐる人々に」贈つた。そして、それを贈ると同時に、優秀な教育を受けた人か、確實な性格を有する人以外には、この著を見せない様にと附言した。何故サン・シモンがこんな事を附言したかと云ふに、「デカルトによつて下圖が出来た學說體系は祕密に組織しなければならぬ。無智なる者はそれについて責任のあることを少しも感じないから彼等をこの仕事の證人とするのは不便であらう」といふ意見を彼が持つて居つたからである。サン・シモンは、かゝる餘分の心遣ひまでして、本書を贈呈したに拘らず、本書を贈られた「所

謂科學の進歩に興味を有する人々」は之を了解しやうとしなかつた。否、寧ろ、彼等は本書に包含されてゐる哲學を了解する事が出来なかつた。彼等は、本書を以つて、注意する必要のない一好事家の仕事としか考へなかつた。然し、この事は當時の學者達が他人の意見を容るゝに吝かであつたといふ理由にのみよるのでなくて其原因の一端はサン・シモン自身も負擔せねばならなかつたのである。その理由は二つある。一つは、サン・シモンは順序などと云ふ者は一切輕蔑して思ひつくまゝ、且、その實行については、何等の反省もせず、研究のプログラムを提出したからである。尤も、本書の序文の終近くで「かくの如く早熟の出版から生じうると思はれる不便をさけるために余に關する注意はすべて之を行つた」とは云つてゐるが、(註六)科學の過去現在及將來と云ふが如き大問題を彼にとつては現在最も重要な知識體系を、恰も彼の不羈奔放な且、支離滅裂な生涯を眼前に見る様に説明したり、「友人と話をする様に自由に讀者に話し掛け」て、學者の著作の如き體裁を備へなかつたから、世人が之を驚くべき混亂した著述だと考へたのは無理もないのである。

その二は、細事に關してではあるが、學問上の誤謬を犯して居つたによる。例へば、ニュートンについては彼は大物理學者が決して犯しては居らぬ矛盾を指摘して居り、又、多くの點に於て、既に確證された眞理に反對する宇宙論を敢えて主張してゐる。従つて、サン・シモンが、この著を送つた時に、サン・シモンが維持して居つた一般の見地の新奇さ——この偉大さ及新奇さは、あらゆる哲學者の熟考の目的となる價值は充分に持つて居つたのではあるが——よりも、より以上に、そこに満ちてゐる細事に關する誤謬に氣のついた専門的學者が、其結果として、彼の思想全部を不信と侮

蔑の眼を以つて迎へたのは當然の事と云はねばならぬ。Lacordaire に送られた寫本が彼の死後一八二六年に行はれたこの學者の書物賣立に際して、手がつけてなかつたと云はれてゐるのはこの理由である。

もう一つの缺點は「一ダネネーヴ住民の書翰」に於て、既に混亂した筆致を示した彼は、この著に於ても依然として、少しは落着いた態度を見せては居るが、「早く書き、再讀しなかつた」らしい傾向が充分に看取されると云ふ事である。

然しながら、彼にとつては「筆振や文の構成は問題ではなかつたのである」。況んや「巧みにそれを集める」といふ事に於ておやである。(註七)彼をして云はしむれば、彼が興味を有してゐるのは、その研究自體に對するのであつて、學者に對する關係ではなかつた。彼はこの著によつて直ちに思想完成を夢みたのでなくて、寧ろこの著を以つて、完成への第一歩を開くと見たのである。即ち、彼はこの著は其名の如く一つの序論としてのみ考へらるべきものだと思つて居つた。か様な一小著によつて、くみし易い世間普通の學者の名聲を得やうなどは少しも希望してゐなかつた。彼は長い研究を一部宛公表して、その都度これに對する讀者の忌憚なき批判と忠告を受け、遂に一切を包有する廣汎なる研究を完成するを究極の目的とし、この研究方法によつて光輝ある永久の眞理に到着しやうと思つたのである。

そして勇敢な彼は「余は云はねばならぬ新らしいものを持つてゐるから書くのである。余は自分の心から出たありのままの思想を述べるであらう。それを修正する勞は之れを常習著作家に任せやう。自分は貴族として、ヴェルマンドア伯の後裔として、サン・シモン公の筆の相續者として書く。今迄、實行された最も偉大なる事、云はれた最も偉大なる事、は貴族の人々によつて實行され話されたものであつた。コペルニクス、ガリレー、ベーコン、デカルト、ニュートン、ライブニッツは貴族であつた」と云ふ病的にまで誇張された貴族的自負を以つて、休みなく、勞働者に、又、同時代の人々に自己の思想を説教し、且つ、その助力を求めたのである。(註八)

然し、結局、彼は否認の意味に於てしか認められなかつた。世人は彼に僅かしか答へなかつた。彼を迎ふるものは無關心と侮蔑とであつた。かくして、サン・シモンに對する嚴烈な試練の時代と貧困のどんぞろが彼を待つて居つたのである。

註一 Saint-Simon, Oeuvres choisies Vol. II. P. 52.

註二 G. Weill, Le Saint-Simonisme hors de France P. 2.

註三 M. Leroy, La vie de Comte de Saint-Simon. P. 226.

註四 Weill, Saint-Simon et son oeuvre. P. 19-20.

註五 Saint-Simon, Oeuvres choisies Vol. I. P. 61-62.

註六 Ibid, P. 59.

註七 Ibid, intro. XXVII.

註八 Ibid, P. 60.

二

ロドリーグは學派の機關雜誌『生産者』の第一卷に於て、又 Fournel は、サン・シモン學派の著書目

録に於て、「十九世紀科學的研究に關する序論」は二冊とも一八〇八年に發行されたと稱してゐる。本書は二卷から成つてゐる。

然しながら、僅か百部のみ出されたと云ふ本書第一卷の寫本で、リシュリュ通りの圖書館が有してゐるもの、及非常に疎れになつたので我々の知る限りではたつた一つしか現存してゐない第二卷の寫本を注意深く研究して見ると、我々は、サン・シモンが一八〇七年から初版の出版準備をして居つたといふ事、少くとも、第一卷の第一版を計畫して居つたといふ事を發見する。即ち、この圖書館の有するものは二つの寫本から成り、それが合冊されて一冊になつてゐる。換言すればその前半は一八〇七年の發行にかゝり、後半は一八〇八年の發行に屬してゐる。(註二)

この著の二つの版即ち今言つた一八〇七年版と一八〇八年版とを比較して見るに、出版上文章上に關しては全く差異を見出せないが、その *avertissement* と *Prefaces* に於ては差違が存してゐる。一八〇七年版に於ては、一八〇八年版の初葉に置かれた *avant-propos* がないが、其反對に一八〇八年版には缺けて無い貴重な *avertissement* が一八〇七年版には在る。何故七年版に掲載されてゐる *avertissement* が貴重であるかと云ふに、サン・シモンはそれに彼が計畫してゐる四つの著作の表題と名稱を示してゐるからである。そして、一面から云へば、この序文あるが故に、我々は、本書が、サン・シモンの著作中にあつて如何なる地位を占めるかを明白に知る事が出来るのである。

サン・シモンは、一八〇七年版の序文に於て、研究のプランを發表しこれを四編に分ち、
第一編 無機體物理學、有機體物理學、及哲學について、

第二編、ユンドルセルトの人智史批判、新歴史觀の原稿、科學の過去、現在及將來について、

第三編、新百科全書の計畫

第四編、以上三編の總括、(註三)

としてゐるが、この分類は、この大天才が此時以來、哲學及宗教體系をあらゆる部分に亘つて考察して行つたといふ事を確然と指示してゐるものである。そしてこの書の價值が單に著作目錄的のものではなくて、一八〇七年につくつたサン・シモンの研究計畫の上に彼が最初に投げた光明であるといふ事に存すと我々の信する理由もこゝにあるのである。

従つて、この「十九世紀科學研究序論」は、サン・シモンが、此時から、自己の計畫を確立した四つの著作の最初の一部分にすぎず、(註三)又同時に——これは彼の既知して居つた事ではあるが——彼自身にとつても一つの準備に過ぎず(註四)且つ、彼の思想も五年も後の「萬有引力に關する研究」に於て初めて、その全威力、全光彩を放つたのであつたけれども、この著の第一卷(註五)を萬有引力に關する研究とは、知的關係に於ては、サン・シモンにとつて重要な著作であることは疑ひ無いのである。

今、此兩者を仔細に讀めば、何人も、サン・シモンが、この二著に於て、新らしい總學說の原則と萌芽とを完全に生みつけてゐる事に首肯するであらう。「萬有引力に關する研究」は後に譲つて、こゝでは専ら「十九世紀科學研究序論」の内容に移ることにする。

註一、Oeuvre choisies Vol. I. intro. XXIV. not I.

註二、ibid, P. 41-42.

註三、サン・シモン曰く「余は各編の編輯されるに従つて、各部を各々、諸君に送らうと思ふ。余は最初のこの一冊で無機體物理學に關する余の意見を諸君に提示する」云。(ibid, P. 42)

註四、「新思想は其所有者にとつては一の立派なる財産であるばかりでなく、同時に全人類にとつても立派な財産である」然るに、「科學の發見者は從來殆んど常に、その研究が完成する迄は自己の發見の祕密を守つて居つた。かゝる見解はサン・シモンにとつては謬つた見解であり、科學の進歩を阻害する者である。たとへ自己の研究が萌芽にすぎなくても進んで、自己の研究の端緒を發表し同時代人、特にフランス人をしてこれに協働せしめ、若し、この研究を實行するに自己よりも勝れた人があれば進んで其實行を其人に任せる」といふ見解がサン・シモンの持論であつた。「科學序論」の亂雜にして未完成なのはこの結晶である。

註五、第二卷は、思想上甚だ萌芽には富んでゐるが、すべてが斷片的であつて、連続した思想を表してゐない。この意味に於て第一卷程重要でない。

三

彼獨特の見解によつて科學の將來を豫言せんとしたサン・シモンは、先づ、科學の過去及現在を彼の科學史觀によつて統一聯絡じやうと努力してゐる。

その最初の一瞥として、無機體物理學の上に投げた觀察の眼は、天文學者と光學者との間に存してゐる——殊に重要な點に關係のある——一の主要なる矛盾を發見した。

前者、即、サン・シモンの語を以つてすれば Solidiens (註二)は「諸星を隔てる空間は空虚である。空虚でないとするなら、その間に抵抗が存する。従つて諸星の運動を變更する摩擦が生ずるで

あらう」と説くに反し、後者即 Fluidiens (註二)は「空間は一の流動體——天體間に存在する空間を横ぎる光といふ物質——によつて充滿されてゐる」と主張してゐる。

この矛盾は何故であるか。又何故に學者はこの矛盾を消滅すために研究しないのか。この問題に答ふるためには、一方に於ては知能機關の作用を注意深く研究し、他方には、事實の研究、即ち、この二世紀間の諸學派の手によつて行はれた進歩を研究する必要がある。この眞理認識への道には二つある。我々はこの方法の一つに分析的或ひは、歸納的の名を與へ、他の一つには綜合的或ひは、演繹的の名を與へた。分析によつて、我々は特殊事實から一般事實に溯り、綜合によつて一般事實から特殊事實へ下りることが出来る。又この方法を前者をば事物をアプリオリイに考へると云ひ、後者をアポステリオリイに考へると云ふ事も出来る。

然らば人類はこの二方法を如何に使用する事によつて眞理に到着し得るか。この問題への解答は、とりも直さず、サン・シモンの歴史觀の根柢をなすものである。彼はかゝる基礎の上に立つて科學進歩の跡を弔ひ、新しい科學建築物の敷地を指定しやうとしたのである。曰く、

「人智はこの二方法を交互に使用し、且これを繼續して使用する事によつてのみ眞理に到着する、而してすべて世に大發見と稱せらるゝものは一方法から他の方法へ移るに最も便宜な時日を決定したものにすぎぬ。しかも、この決定自體が第三に位する方法、或ひは、より適當な言葉を以つてすれば、Une troisième opération de l'esprit を構成する」云。(註三)

演繹的方法と分析的方法との交互使用、そして新方法、換言すれば第三方法は、この兩者から生れた新生兒であるといふのが彼の見方であつた。然も、この事は只に理論的の遊戯ではない。事實がこの理論を正當なりと確認してゐるのである。かくて、サン・シモンは我々が偉大なる哲學者と呼ぶ人々の思想を順次に検討して行つたのである。

十七世紀の初年に於て、人間は觀察の上に彼等の推理基礎を置き初めた。十七世紀は發見と發明の曙であり、人間の力の自覺の始まつた時代であつた。誤謬と冒險との漠然たる憧憬の結果ではあるが、アメリカと印度への航路が發見されて、地球の全表面は完全に征服され、加之、望遠鏡は天體の祕密を曝露し、顯微鏡は地上の微生物の存在を示した。ローマ法王の權力の衰微、國家の隆盛、宗教改革の烽火あらゆるものは、合して「知識は力である」といふ信念、科學は人間の生活を完全に改造しうるものであると云ふ期待を抱ける「天才の出現を待つて居つた。ベーコンが筆を執つたのは正しくこの時であつた。彼は時運の期待に反さしなかつた。彼は己が新研究法を論述せる「新オルガナム」をアリストテレスの論理學書、「オルガナム」に對立せしめた。

彼は云ふ「科學の真正な合法的の目標は、人間生活に新しい發見と力を賦與すること以外にはない。然るに多數の人々は、この事を少しも感じない。何所までも雇人的であり、教授的である。」例之、アリストテレスの論理學、その神學化たるスコラ哲學の奉ずるものは正に其適例である。その使用する武器たる三段論法はたゞ論敵説伏の要をなすのみで、何等人生に貢獻する所を持たぬ。然も今一步譲つて、「科學の目的は正しくおかれたとしても、その方向が全然間誤つて居つた。凡て

の人は秩序正しく構成された實驗方法によらず或は、傳統の雲霧の中に、或は、議論の旋風と渦卷の中に、或は偶然の漠然とした消化不良の實驗の混亂と錯綜の中に取殘されて居つた」。(註四)彼が「新オルガナム」に説いたものは、この誤謬を訂正するための新しい論理形式であつた。事實の經驗より發し、漸を以つて進み、その事實に通達する歸納法がそれである。歸納法は一切の科學に於て有效である。自然科學のみならず、倫理學、政治學、論理學を包含する精神科學に於ても有效である。この方法こそ、「人間の知識と力を一致せしむる」方法であつた。サン・シモンの言を以つてすれば「彼はよき方法を豫見したのである」。「彼は綜合的方法を採用した。彼は全科學の見地に身を置いた。彼は科學を一瞥の中に包擁した。彼は既得知識の集積を秩序的に分割し又再分割した。彼は、彼自身の表現に従へば、我々の知識の新オルガナムを發展されたのである。」(註五)かくして、科學史最初の一大時代を合圖し、實證哲學創始者たるの名譽を有する事の出來たベーコンは、自己の財産をより偉大なる相續者に譲る事が出來た。

ベーコンの後を襲つたものはルネ・デカルトであつた。新思想と新發見の時代に次いで豊富な思想と事實とを整理し、組織し、且之を確實な根本思想に歸着させやうとする試みの時代が來た。この氣運に促され續々輩出した大なる組織的思想家の筆頭たるデカルトは明白に分析を経て構成的思索へ至る途を見出さうとする努力を示した。彼は綜合的見地に立つた。彼は綜合的方法によつて一新科學體系の組織に着手した。彼の創思したものは旋風説であつた。實證科學の進歩がこの學說に負ふ所は少しとしない。

かくて、デカルトは人間の精神を自己の内から擲出し、之をあらゆる障碍や尙人間を束縛してゐる幻影から解放した。サン・シモンをして云はしむれば「デカルトこそ、科學的錯亂を秩序立てたものである。古代科學と近代科學との間に區別の線を引いた。神學者を攻撃するために物理學者を呼集める旗を立てたのは彼である。彼は世界の王笏を想像の手から奪取し、これを理性の掌に置いた」と。(註六)

デカルトは、

「L'homme ne doit croire que les choses avouées par la raison et confirmées par l'expérience.」

と云ふ、有名な原則、迷信を雷撃した原則、我々地球の精神的顔面を變化させた原則を設立した。彼は *Deux méthodes* と云ふ謙讓な名稱を附した證明方法によつて、彼に至る迄の既得知識は單に材料としての價值しか有してゐないことを觀破した。然し、ガリレオの例を恐れた彼は巧みに、且非常な注意を拂つて自己の思想を發表した。即ち、彼は自己の思想の進行を阻げないため、又その發表を阻止されないために、神の存在を認めたと云ふ公式の宣言を發した。これは一に僧侶の迫害を防ぐ意に出て居たのであるが、彼はこの神と云ふ示顯的思想に何等の實際的職能を行はせて居ない。彼はこの思想に信仰を從屬させなかつた。彼は神なる觀念は人類が未だ無智で小兒の状態にあつた時代に、天才が作り出した科學的の概觀に過ぎぬとしか考へて居なかつた。

諸學派は十七世紀末迄ベーコン及デカルトの示した途を歩いて居つたが、この間百年の間に於ける彼等の研究を要約すると左の二項に分類出来る。即ち

- 一、諸學派は、宗教學說にすぎなかつた古代學說の最も本質的な缺點を明るみに持出した事、
 - 二、新學說の建築を始めるに必要な最初の土臺を建設した事、の二つである。
- かくて、我々は十八世紀の科學的研究に移る。(註七)

普通我々は長時間に亘つて同一の立場から同一物を凝視し続けると疲労する。そして、最早、事物の間の新關係を發見する能力を失つて了ふ。十七世紀末に於ける學派の心理状態がこれであつた。アプッオリイに事物を觀察し續けた學派は彼等の科學的眼を疲労させて居つた。デカルトは多くの弟子を有して居つたが、彼等は何れも失明して形而上學的迷宮に踏込み、形而下學の見地を見失つて了つた。科學の進歩も同時にこゝで停滯したかの觀を呈した。

さりながら、この現象は、デカルトの立場が謬つて居つた結果ではないのであつて、デカルトの行つた仕事はデカルト一人で終結を告げたのではないと云ふ事を示すものであつた。彼の研究は今迄に何人の手によつて行はれたものよりも遙かに廣汎に亘るものであつた。そして、其實行及完成にはまだ〳〵多大の年月を必要とする企であつた。

すべて「最初の實驗は下繪である。デカルトの仕事はすべてこの下繪畫である。旋風説は彼が麗筆になる新科學體系の賞讃すべき總下繪である。「人は理性によつて自認し、經驗によつて確信した事のみを信すべきである」と云ふ彼の格律は、前記の下繪を如何にして彩色するかを最も精確に示して、以つて、新學說組織を今後引繼ぐ者に與へた指針であつた。事實、デカルトは自身この指針によつて研究を續け前掲の二條件の中第一條件を満足に遂行して了つたのである。

旋風説には、個別事實に充分なる説明を與へ得ないといふ缺點があつたため、第二の條件を満足する事は彼には出来なかつた。然しこの旋風説の未完成といふ事は、我々の驚く必要のない事であつて、その責はデカルトにあるのでなくて、當時に於ける人間の經驗は以つて、これを完成するに足りなかつたからによるのであつた。即ち「人智の寶庫は觀察事實を未だ充分に供給されて居なかつた。デカルトがそれを建設しやうと試みた時には、新科學殿堂建設のためには、未だ既得材料が充分に存して居なかつた。これがこの哲學者にとつて、その企が充分成功しなかつた譯である。」こゝに於て、十八世紀の今日では「デカルトによつて建設された建物は崩壊する運命にあつた。然し、その建物に使用された材料は大切に保存しなればならなかつた。それに新しい材料を附加すべきであつた。その結果材料の補給が完備する迄殿堂の建築工事は延期しなればならぬ。」一言にして云へば、事物をアツリホリイに見る事は止めて、アボステリオリイに考へねばならぬ。變更の時期が到來するまで「當分の所は綜合的方法を捨て、分析的方法を採用しなればならぬ。」(註八)既に、デカルトはこの推移に従つて、サラセン人によつて歐洲に輸入された材料及コペルニクス、ケプレル等によつて供給された材料を使用した。次になすべき仕事は新材料を集めて、その後に見える最初の最も秀れた天才の處分にそれを任せる事である。

かゝる事態に出たロック及ニュートンはデカルトの後繼者として、新材料の最もすぐれた集積者となる運命を有した。然し、彼等は學問的領域を分配した。ニューンは無機體物理學を選び、ロックは有機體物理學を選定した。「二人は平原に下りるために科學の高原を放棄した」換言すれば、二人

とも分析のために綜合の世界を離れた。

ニュートンは一つの林檎の落ちるのを見て、この單純な事實から次第に萬有引力の思想に迄上つて行つた。ロックの注意も、最初は我々に最も直接な感覺の上に注がれた。そして、彼は抽象に抽象を重ねて遂に人智の完全性の概念に上り着いた。

この進路の變更、綜合から分析へ完全に移轉する迄には、サン・シモンの所謂ロック・ニュートニアンとデカルト派との間に、何れか選べるべきかについて烈しい論争が渦を巻いて居つた。然し、この論争には何人も容易に看取することの出来る明白の誤謬が根ざして居つた。何んとなれば、前述せし如く、若し、ロック・ニュートン派にして、デカルトは彼の當時としては可及的最大限度以上に新學說組織のために力を盡して居つた事、又、デカルトの旋風説は一の豫備的學說であつた事を認めたならば「彼等は決して旋風説を批判しなかつたであらうし又デカルトの研究をロック及ニュートンの研究に對立させる様な事はしなかつたであらう。即ち「彼等は二方法、綜合的と分析的とがどちらがよいものであるかと云ふ事について——例へば、ポンプの場合、ピストンを上げるか下げるか、何れがより以上に價值を有するものかを定める様な餘計な考へについて——論争しなかつたであらうに」。(註九)サン・シモンは兒戲(Suerie-paerie)と冷笑してゐる。若し、正しい見地にある人ならば、かゝるポンプの問題に答へて「若し、ピストンがポンプの體の上部にあるなら、それを下げねばならぬ。それが下部にあるなら、それを上げねばならぬ。ポンプを動かすものは上から下、下から上への交互的運動である」と云ふであらう。

とまれ、この論争はデカルト派の敗北に終つた。勝利の原因は必然に廻り來た交替時期にある事を察し得なかつた學者達は、分析的方法を以つて綜合的方法に優れりとなし、眞理探求者はロック及ニュートンの道に従ふべきを公言した。

十八世紀は擧げてニュートン及ロックの思想完成に費された。無機體物理學の研究に於てニュートンを承繼したものはラグラシヂ、ラプラス、及ラボアジエあり、コンデイアック、コンドルセー及リンネチは有機體物理學に於てロックの後を繼承した。従つて、ロッキーニュートン派とデカルト派の論争後に於ける重要な四つの科學的著作として、一方では、

La Grange. Théorie des fonctions.

Laplace. Mécanique céleste.

他方では、

Condillac, Traité des sensation.

Condorcet, Esquisse d'un tableau historique des progress de l'esprit humaine.

を擧げる事が出する。

ラグランジュのニュートンの概念の發展を完成に寄與した貢献は、ニュートンの微係數の計算理論を完成して、そこから、ニュートンが誤つて混入させた物理學の概念を除外したといふ事にある。(註十) 次いで、この計算の適用を總括し且完成したものがラプラス氏である。殊に月の理論に關するラプラスの研究は非常なものであつて、「光榮の寺院」(註十一)に於ける優秀な地位を與へられるに足る

ものであつた。

月の理論は、これまで不完全であつて、天文學者は、この衛星の運動方法を不規則であると立論して居つた。然し、何人もこの理由は指示しなかつた。ラプラスはこの重大な缺點を滿すに次の如き證明を以つてした。即ち、

- 一、所謂、月の不規則な運動は、其實、甚だ規則正しい運動であつた事、
 - 二、この運動は萬有引力の直接の結果であつた事、
 - 三、ニュートンの學説が推理し得なかつたため、一つの除外例として、一つの特種なる場合として提出されたこの事實は、反對に、この學理が最も堅實に基礎を置いたすべての事實の中の一つとして考へられねばならなかつたといふ事、を證明した。(註十二)
- 一言にして云へば、萬有引力に除外例なしと云ふのがラプラスの功績であつた。かくしてニュートンの思想は完成された。

次にはロックの思想完成について述べなければならぬ。彼は精神的と呼ばれてゐる階級に屬する現象、即ち、知識現象を物理學的觀念の範疇に入れる事を自家の目的として提言した。「何んとなれば、彼は、動物の無意識的行動、本能的示顯的神祕的觀念を攻撃し、論争し、且擊破したからである」。

然るに、當時は未だ示顯的觀念を信する者の數が甚だ多かつた。僧侶團體は二派に分れて、激烈な闘争を行つて居つたが、利害の共通なる所では、昨日の敵も今日の味方である、彼等は共同の劔

を按じて新科學體系の樹立に立向つた。

兩派の僧侶は、何れも、俗人を自己の臣下であると考へて居つた。彼等は、その愚なる臣下に「祭壇の執行者は一切の科學的大問題の解決を發見する能力を不可解な超自然的權力から譲受けたと云ふ觀念」を維持させ様とした。

僧侶のかゝる非科學的な態度は、新科學體系樹立を自己の大目的として居つたロックをして、その目的達成のための一時の方便を用ふる事を餘儀なくさせた。即ち、ロックは僧侶の壓迫を避けるために示顯的觀念の存在しない事を立證する著作の冒頭に、かゝる觀念を自分は信じてゐると云ふ公式の宣言を附帶するといふ不可解の態度をとつた。ロックが止むなくとつたこの讓歩は、彼の眞意を探ぐるに多大の苦痛を後人に残した。コンデイアックの如きも、このために惱まされた一人であつた。然し、彼が筆を執つた時には、僧侶の權力も多く失れてロック時代程でなかつたので、ロックより少い危険に暴露されて居つたコンデイアックは、ロックより以上大膽に所信を述べるこゝが出来た。

彼の認識論は、經驗其のものを全然受動的に解釋すると同時に、一切の科學が經驗を基礎として可能なることを指摘してゐる程に一切を經驗から引出さうとする猛烈な企圖であつた。この企圖によつて、コンデイアックはロックの研究の前半、即ち、個人知識の發展に關するロックの思想を註釋するに成功した。

この残された他の一半を完成する任に當つたのはコンドルセである。彼の研究によつて、初め

て、人類の無限の完全性に關するロックの概要が發展を見たのである。「人智進歩の表」が即ち之れ下ある。

すべて、著述家は其時代の政治状態の影響を避ける事は出来ぬ。ロックは僧侶のために思想の自由なる發表を阻止された。然るに、それと反對に、フランスの平等主義者はコンドルセをして自由に其思想を誇張するを得させた。コンドルセが其著作を完成した時には革命的擾亂は其極點にあつた。その一方の旗頭となつた彼は、フランスに共和政府を建て、あらゆる人民をして王權と僧權を排斥した社會組織を是非採用しなければならぬと云ふ意見を發表した。彼の黨派の面々が之れに和して打つ大砲の響は股々として巴里の空を動かした。然し、かゝる急迫した事情は他面に於て、彼を誤らせた。未曾有の擾亂の巷に立つた彼は、自己の提議した原則から秩序ある結果を引出す爲に必要な周圍に對する冷靜なる觀察を忘却して了つた。この結果、

Récapituler la marche de l'esprit humaine et terminer cette récapitulation pour l'exposé de conjectures formées sur la marche qu'il suivra.

と云ふ彼の良概念も、これを實行するに際して、王に對し、又僧に對する刺毀の言を化した。歴史を繙いて、偉大なる征服者と哲學創始者とは、今迄、其數が同一であつた事、及其事實から、兩者は、成功に必要な能力及性格を異にし、決して相和すべき性質のものではないと云ふ結論を得た。サン・シモンは、後者に屬すべきコンドルセに「當然、政治から引退し、自分の部屋に引籠るべきであつた。そして、彼が、自己の幸福のため、又人類の幸福のために有益な方途に自己の生得

知能を使用すべきであつた」といふ批判をしてゐる。(註十三)さりながら、コンドルセの著作は、細微の點に亘つて誤謬もあるが、恐らく人智の最善なる生産物の一つであることは拒み難い。比喩を以つて示す事が許さるゝならば、鑛山を發見したものはロックであり、掘出した鑛石を溶解せしめて鐵を吹きかけたのはプライス (Price) 及ブライエストリ (Priestley) であり、最後に、かゝる金屬を以つて、新らしい鑛坑を發見したものがコンドルセであつたのである。

註一、Saint-Simon, Oeuvres choisies Vol. I. P. 64. Not 1.

サン・シモン曰く「新思想」を精細に説明するためには新らしい言葉が必要である。

「物體物理學は二つの部門に、固體物理學と流動體物理學とに分類しなければならぬ。従つて「物體物理學の研究に没頭してゐる學者は二階級に分類しなければならぬ。この階級を表示するために最も不穩當でない言葉は、天文學者と光學者である。然し、この言葉は余が示さうと思つてゐる考を甚だ不完全にししか世人に通じさせないから余は、Solidicien と Fluidicien と云ふ言葉を使用するに賛成する。」

註二、ibid, intro, XXVIII.

註三、メーロン、ノダム、オルガム、岡島龜次郎氏譯、三三頁、七〇―七二頁。

註四、Saint-Simon, op. cit, P. 67.

註五、ibid, P. 68-69.

註六、ibid, P. 69.

註七、ibid, P. 72.

註八、ibid, P. 79-77.

註九、Cf. ibid, P. 80-84.

註十、ibid, P. 245.

註十一、ラブラス曰く、「すべて天文學上の計算に於ては遊星は完全な球體として考へられてゐる。問題をかくの如く置くことは太陽系を構成してゐる星の全體的及相互的運動を視るに限る場合は不便を感じない。等閑に附されてゐる量は吾人が計算してゐる量に比較すると甚だ少量であるから、よく見ても、この不精確から生ずる誤謬には氣がつかない程である。然し、吾人はこの量を等閑にするに云ふ誤を月に關する理論に於て犯して居つた。この理論を完成する方法は、地球を完全な一球體としてではなく、その廻轉軸の兩極端に於て扁平になつてゐる一球體として地球を考へて、月に及ぼす地球の引力的運動を計算する事である」(ibid, P. 86-87)

註十二、ibid, P. 109.

四

サン・シモンは以上を以つて、十七世紀及十八世紀科學史研究の第一部とした。そして、その研究の第二部として、特に、植物學及化學をそこから分離した。何のために、彼がかゝる特別な區分法を採用したかと云ふに、それは畢竟、彼の目的が最も概括性の廣い結論に到着する事に存したからである。より廣い概括性を有するものを得るには、より少い概括性を有する對象に長時間注意を停止さす事は明かに不利である。その仕事は、寧ろこれを第二位を占める學者の手に放任するが有利である。

この理由で、サン・シモンは、個別科學を二分した。概括性の多い天文學、數學、論理學及生理學は第一階級に屬するものとして、包括性の少い植物學及化學より一段高い地位を占めた。

第一階級に屬する科學は、既述せし如く、ベーコン、デカルト、ニュートン、ロック等の超越的天

才の活動を要求した。然るに、第二位的地位を擁する植物學及化學は、其性質上甚だかゝる魅力に乏しかつたため、前記の諸天才の一人だに引寄せざる事が出来なかつた。

植物學が辛うじて僅かにロックの注意を引き得たにすぎなかつた。

我等の大なる植物學者 Linné は、勿論、偉大なる Naturaliste ではあつたが(註一)前記の理由で第二位的の地位しか科學史上で占める事は出来なかつた。殆んど一つの術語集にすぎなかつた斯學から、彼は組織的な植物學を創設したといふ大なる功績を有して居つたにも拘らず。

彼は志した方面が二次的科學であつたために、彼の偉大さも、ラグランヂ、ラプラス及コンデイアックの如き人々と對立させて甚だ見劣がするものも是非ない事であつた。

この事は、化學的天才である Lavoisier についても亦同様である。

最後に、我々は、概括性の少ないと云ふ理由でサン・シモンが、化學及植物學を十八世紀の研究の第二部に配置し、天文學、數學、論理學及生理學を第一部に入れたと云ふ彼獨特の見解は、一見何んでもない事ではあるが、デカルトの後任として綜合的世界觀を樹立しやうと云ふ彼の努力と自負から生れた當然の歸結であることに注意しなければならぬことを附言しやう。

かくて、彼が「十九世紀科學的研究に關する序論」第一卷第一編、換言すれば、十七世紀から十八世紀に及ぶ科學史は、各天才に關する批判と彼等の著作から採萃された長い引用(註二)によつて證明されたが、この結果、サン・シモンは何を得たか？

彼は科學史上に浮上つた或る事實——或は法則とも云ふべきであらう——を抽出發見するに成功

した。その事實とは、

一、人智は交互にアプリオリイに又アポステリオリイに事物を見る事、

二、科學的一大發見とはアポステリオリイに又アプリオリイに科學全體を考究する新らしい一方法に過ぎないといふ事、

以上二つの根本的事實と、それから抽出された、

三、長い科學的間隙が科學的大發見を分離したといふ事實。

四、其大發見は二人によつて、又一人によつて交代に行れたといふ事實。

の四事實である。(註三)

第一と第二の事實は既に證明は與へたからその必要を見ないが、最後の二事實を次に證明しなければならぬ。

第三の事實、即ち、何故に科學的大發見は長年月を必要とするか。

大なる科學的發見とは、或る科學的發見が、科學研究に従事する學者の研究すべき方向を變化せしめる程偉大なものであつた場合に於てのみ云はれる事であつて、換言すれば、この場合に於てのみ偉大なる發見としての價值を有する事が出来るのである。

然るに、科學研究者の従ひうる方面は綜合的方面か、或は分析的方面か何れか一つに限られてゐる。そして、一學派が、この二方面の一つから他の方面へ移る事、換言すると、綜合から分析、或は、分析から綜合へ移る事は、彼等が研鑽してゐる二方面の中の一つを残り限なく一巡した後でな

ければ不可能なのである。この事からして、我々は、科學的大發見の到來を待つには長年月を必要としなければならないのである。

次に第四の事實は、第一及第二の事實から推測すれば容易に分るのであるが、たゞ之れに附加しなければならぬ事は、自然の理によつて、アプリアオリイは簡單であるが、アポステリオリイは複雑であるといふ事である。

アプリアオリイに事物を見るといふのは、普遍的原理に一つの組織を興へるといふ事である。従つて、結合から統一を要求する行爲であるから、多くの人の努力の結果と云ふ譯ではない。然るに、他方、アポステリオリイに事物を見る事、或は、個別的事實を研究する時には、一人でそれに従事したのでは餘りに多くの時間と勢力を必要とする。

今、科學國を中央が大なる山となつてゐる地勢を有する國と假定するならば、この山の頂上にある者は一人にしてよく麓の諸地方を眺望する事が出来る。然し、頂上では一人で眺望出来る全景も平地でこれを一巡するには少くとも二人を要する。前者は綜合の場合であつて、後者は分析の場合である。これを史實に照して見ても、十七世紀には科學國の山上に立つたデカルトなる一人の指導者を、十八世紀には平地に座を占めたロック及、ニュートンなる二人の指導者を我々は持つて居つた事が實證される。

サン・シモンによれば、以上の四事實は事物必然の理から生ずる一法則であつて、この法則によつて初めて人智の完全なる發展を見る事が出来るのであつた。彼が本著の初めに於て提出した「人類はこの二方法(綜合的、分析的)を如何に使用する事によつて眞理に到着し得るか」と云ふ疑問に對する解答は、こゝに満足な結果を得た譯である。而して、我々は、サン・シモンが、この事實の作用に對して甚だ重要性を附して、「丁度、心臟の收縮と膨脹が我々の肉體的生活に必要な活動であるが如く、これは精神生活に必要な活動であり、平和なる時代に於て人類が交互に働く課程であつた」と斷言してゐるのに充分注意しなければならぬ。(註四)

尙一つ注意しなければならぬ事は、この事實の支配によつて、既に一人或は二人の天才が社會に出現すれば「甚だ有力な人も、彼等の代理人としてしか認められることが出来ない」と云ふのは當然であつた」といふ派生的の事實である。(註五)

天才の代理人を勤めるといふのは、天才の思想を註解するか、又は補筆するといふ意味である。不幸にして代理人の地位を與へられた天才は、學派の進行と歩調を同うし、且其目的に向つて接近して行く事には變りはないが、最早其關係全體を了解出来ない地位にある。換言すれば、彼等には目的物の作圖全體が要求せられず、部分的作圖が要求されてゐるのである。然し、前者と後者とは腦力の點に於ては些も間隔はないのである。事實に於てこれを考へて見ても「ラグランジュやラプラスの如き人々の頭腦の組織や思考力はニュートンのそれに劣つてゐるだらう?余は決してそうは信じない。」彼等をしてかゝる下位の職に甘んずることを餘儀なくせしめたのは一つに前記の四事實の活動から生じた境遇のしからしむる業である。

「十六世紀の末には、彼等も幾多のベーコンであつたらう。十七世紀の初には幾多のデカルトであ

つたらうし、十八世紀の初葉には幾多のニュートン、或はロックに彼等もなり得たのである」。(註六) 故に、若し「これらの人々が今日二十才を過ぎてゐなかつたならば、其生涯の半分に至らぬ前に、彼等は學派の進行を變更させたであらう」とサン・シモンは云つてゐる。

如何なる天才も、其時期を得なければ、即ち、四事實の支配を蒙る以上は、單なる部分的科學完成者たる以上に出る事は出来ないと言ふ所に、天才の智腦をのみ中心とする史觀を否定して、新しい歴史の基礎が確立せられてゐるのを吾人は躊躇することなく認知する事が出来る。歴史を帝王の歴代日誌然たるものから解放して觀察された事實の上に基礎づけやうとする彼の努力の第一歩がここに表れたのである。これと同時に、この一群の事實は又他の重要な結果を指示してゐるがそれは最後の結論の時に述べる。

註一、サン・シモンは表面の現象を考察の基礎として研究する人々には *Naturaliste* の稱を與へ、現象のメカニズムを發見するに努力してゐる人々を *Physicien* と呼んでゐる。(Oeuvres choisies Vol. I, p. 139)

註二、Condillac 及び Descartes P. 92-93, P. 94-98; Co. doret 及び Leibniz P. 99-107; Lagrange, P. 80-84; Laplace P. 84-85; Lavoisier, P. 113-125; Linné, P. 126-138.

註三、*ibid.*, P. 88.

註四、*ibid.*, P. 73.

註五、*ibid.*, P. 141.

註六、*ibid.*, P. 142.

五

サン・シモンは第一編に於ては、「科學の進歩を直接目的とする研究を配列して」これを十七世紀及十八世紀の歴史的關係に於て考察した。この研究から彼が得た收穫が没すべからざる物である事は今述べた通りであるが、彼は更に一步を進めた。

「學者が専心してゐるのはたゞに科學の進歩を目的とする研究のみではない」と云ふ意見から、サン・シモンは、社會組織を改良しやうとする學者の新らしい努力を考察し初めた。即ち、彼は今迄自分がして來た十七世紀及十八世紀の研究を十九世紀の研究と連続さす一つの楔として―しかも重要な連續因子としての十八世紀の批判的著述を發見したのである。

曰く「ベークンから我々に至る迄に包含されてゐる歴史は歴史の中で最良の部分である。

然し、この時期に包有されてゐる事實は甚だ複雑してゐるから、古代制度の崩壊作業、及新建築のための努力を充分且明白な方法で説明するには、甚だ大なる判斷力からか、又は甚だ大なる實行能力からそれを推知する必要があるだらう」と。(註一)

吾人はサン・シモンがかゝる能力を備へたものとして、「古代制度の保護者たる僧侶、人間の想像力の最も旺盛な、推理に於て最も無能な時代に人間が考へた組織の保護者である僧侶」に對する科學者の勝利の經過について、彼から聞くことが出来る。

ベークン以來進歩して來た科學の進展を新らしい見地から研究したまへ、十六世紀の末に、ベークンは、既存の科學團體に對し、即ち、僧侶に對する俗人學者の一揆を引起した。彼が科學の新領土に立てた旗は曉天に心地よく躍つて、すべての物理學者はこゝに馳參じた。十七世紀の初葉に

は、デカルトが出で、同じ土地に一大燈明を掲げた。デカルトの死後、間もなく、レイ十四世は科學學會を設立した。この學會は、幾何學者と物理學者のみから組織されて居つた。この學會は、創立以來、神學者の居城に包圍攻撃を開始した。堅固な神學體系でふ城壁の中に庇護されて居つた僧侶は、この城壁を破壊せんものと犇々押寄せてくる物理學者の旗指物に甚だしい眩惑を感じた。中には、デイデロ及ダランベールによる召集の喇叭は高らかに響いた。

二人は物理學者より成る聯合軍の總指揮官であつた。然し、「ベーコン以來、物理學者に對する尊敬は不斷に増加し、神學者に對する尊敬は引續き減退したといふ事は確實である、と同様に、一七五〇年に於ては、尙僧侶が大なる権力と莫大なる富とを享有して居つたと云ふ事も又確實である。」(註三)神學校(Sorbonne)は尙唯一の既設科學裁判所であつた。僧侶は尙公教育の責任を負ふて居つた。

換言すれば「一七五〇年に於ては、古代制度の劣悪な部分が、すべて尙、完全であつた。この劣悪な部分によつて、僧侶は衆愚の上に自己の權威を振ひ續けて居つた。」デイデロ及ダランベールの目的はこの部分の破壊にあつた。

最大の批判的著述である百科全書は、單に中世の科學體系の破壊を目的としてゐるのではなくて、又、この體系の上にて建てられた政治的社會的建築の崩壊を目的として居つた。従つて百科全書學者は新建築のためと云はんより、寧ろ實際的には、古代制度の完全なる崩壊のために活動したと云はれるべきであつた。以上の觀察から、サン・シモンは「僧侶の権力及財産を改廢するために、物理

學者によつて使用された方法を十分精確に知り得て、以つて、この第二編の目的である「社會改良を目的とする學派の研究」を完全に果さうと試みた。

このために、彼は十八世紀の批判的著述の研究は次の四部分から成立すべきであるとした。

一、百科全書の批判

百科全書を第一位に置く理由、

二、百科全書學者の著述の先驅をなし、且その準備となつた著述の瞥見、特に、十八世紀前半五十年間の文學上に於けるゾルテールの影響、

三、ジャン・ジャック・ルソーの研究

四、十八世紀の文學的著述の要約、(註三)

然し、サン・シモンが實際に書いたのは初めの一つ丈であつた。

彼が百科全書の研究を第一に話さねばならぬと信じた理由は、「百科全書は一七五〇年に初めて着手されたものであるが、この著作は十八世紀全體を通じて、最も卓越したものであると云ふ理由及、この世紀の文學的著作すべてを、百科全書的研究を引出す準備であると認めると云ふこの見方は、これらの著作を年代的に説明するより遙かに明確であると余に思はれると云ふ理由」二つである。(註四)

彼が、百科全書に置いた信頼と價值とは實に莫大なものであつて、既述せし如く、善き百科全書をつくる事は、即ち、本書の目的でもあり、又本書著述の動機をなしたナポレオンの諮問に對する

解答其のものでもあつたのである。「善き百科全書をつくる事は、地球上の第一流の學者の協力、五十年の研究、一十萬法を必要とする仕事である。」然し「ナポレオンの威望及時勢の力は世界を支配するであらう。英吉利人は尙抵抗してゐるが、間もなく、彼等も屈服するであらう。そして、彼等の帝國の没落は必然に戰爭を終決せしめるであらう。この戰爭が終れば、ナポレオンの注意は、絶對的に諸科學に向けられるだらう。」かくして、「彼の指揮の下に、彼の命令の下に科學研究所は百科全書を編輯するであらう。この書は推理と觀察の上に、人類の永久の指導となる普遍的原理を建てるであらう。」(註五)

彼は、善き百科全書の成立を以つて統一的原理の完成とまで信じて居つたが、これを發明的著作の中に置かるべき價値を有してゐるものだとは思つてゐなかつた。

神學の原理と物理學の原理とは明白に對立してゐる。何んとなれば一方は顯示や靈感を基礎としてゐるに反し、他方は習得知識を基礎として觀察事實を附加するものであるからである。デイデロ及ダランベールはこの兩原理を説明しやうとしたが、僅かに後者が前者に優つてゐると云ふ説明的批判の目的しか達し得なかつた。批判的眼を以つて檢討された百科全書は、これら二種の原則の比較にすぎなかつた」と云ふ理由で、サン・シモンは「百科全書は發明的著作の列序におかるべき價値をもたぬ」と結論した。(註六)

然し、サン・シモンは百科全書が如何なる内容を有してゐるものか少しも説明を與へて居らぬ。

「エンサイクロペデー、この言葉は希臘語である、一切の科學を聯絡する事を意味し、或は人智の

全體系を意味するものである」と云ふ言葉を殘した丈で(註七)直ぐ後に、百科全書の序論の再版をのせて「十九世紀科學的研究序論」の第一卷を閉ぢてゐる。

彼は、第二卷に於ても、第一卷に於ける未完の研究を繼續する様子は更になく、反つて、これを放棄する事を明白に述べてゐる。

即ち、彼は第二卷の卷頭に「新百科全書樹の圖を挿入した後、續く序文に於て、今迄研究して來た進路を追求する代りに、原稿と名づける多くの斷片的拔萃を挿語的に示さうと思ふ」と公言してゐる。(註八)

ともかく、「十九世紀の科學的研究に關する序論」は著者の氣まぐれな性質を充分に我々に示したまゝ、所謂龍頭蛇尾に終つてゐる。

註一、Oeuvres choisies Vol. I, P. 145-146

註二、Ibid, P. 145.

註三、Ibid, P. 147.

註四、Ibid, P. 147.

註五、Ibid, PP. 242, 243.

註六、Ibid, P. 149.

註七、Ibid, P. 147-148.

註八、Ibid, P. 155-156.

六

従つて「十九世紀の科學的研究に關する序論」に於ては結論がない。換言すると、彼は、何所に於てもすべて結論らしいものを躊躇する色を見せて居つた。

それで、結局、我々は、選集の編者の云ふが如く「サン・シモンが五年後『萬有引力に關する研究』に於て初めて、明確に規則正てた彼の科學的研究のこの最高の結論は、若し吾人にしてかくの如く説明する事が出来るなら、「十九世紀の科學的研究に關する序論」の第二卷にある新百科全書樹に於てかゝれて居る」(註一)と云ふ見地をとらない限りは、この著を通じて彼の結論とも見るべきものを發見出来ないのである。

然し、こゝに注意すべきことは、サン・シモンが書いた此の新百科全書樹の圖なるものは、只に「十九世紀科學序論」の結論たるに止まるものでなくて、寧ろそれ以上に完成されたものであると云ふことである。

樞蒼として生茂り、幹は云ふまでもなく、枝と云はず、梢と云はず、各個別科學の名札がリボンをもつて張り渡されてゐるこの新百科全書樹を、彼の著書に挿入された繪圖で見ると、この事は、直ちに首肯されるだらう。

従つて、「序論」は、この樹を完全に説明するには頗る不充分なものである。故に、この樹を完全に説明するためには、彼のそれより後期のより廣い内容を有する著作の助を借りてくる必要がある。何んとなれば、この樹の根本に示された Physicisme と云ふ總括的觀念の内容には、科學、道德及

産業と云ふ三大要素に同一の價值が與へられてゐるのに、彼は、未だ、この著に於ては此等三要素に同價値を與へると云ふ思想を明確に持つてゐなかつたからである。(註二)

編者がこの樹を以つて「序論」の結論となす事が出来ること論じた際に「かくの如く説明するならば」と敷衍したのは以上の意味であらう。

併も、事實に於て、サン・シモンはこの大著に手をつけた時には、彼が完ふしてゐなければならなかつた一切の生活を未だ一巡してゐなかつたのである。一八〇七年までの彼の生活は政治的にも道德的にも未完成であつた。

然し、三要素同値の法則は「序論」に其の萌芽を有して居つた事は確實である。即ち、序論の第一卷の初で、知識獲得の方法を論じ初めた時からその土臺を造りつゝあつたのである。分析と綜合の機能及性質、又兩者の交叉から生ずる第三の方法の機能及性質、次いで以上の事實を歴史的に觀察した結果である四事實から成る一法則、これこそ、實に、序論第一卷の最大收穫であつた。

かくして得た法則的事實は科實の新方法を確立する基礎として使用されねばならぬ。然るに、此方法の改新と云ふ事は、いはば、卵の形をした要素形態の科學、政治、道德を一様に改新する事を意味する。その立場は、科學、政治、道德の各自の牙城に向つて改革を要求するのではなく、これら三要素を發生すべき核に向つて直ちに迫るものである。

従つて、平等に、且同時に、科學、道德、政治に向つて要求すべきものを要求しうる地位を有するものである。

もつと崇高な言葉で、この立場を表現すれば、それは一つの宗教をつくることである。

この意味に於て、「十九世紀科學的研究序論」の第二卷は、サン・シモンの要望する新宗教 *Physicisme* に對して、その最も根本的なものを明瞭にしたと云ふことが出來やう。

註一 *Saint-Simon, ibid. Intro. XXXI.*

註二 " *ibid. " XXVI.*

油谷十二 著 「會計學實務」

片岡義雄

山 田 正 夫

本書は前後三卷、本文二千二百餘頁に加ふるに凡そ二百頁に達する附録を包含する頗る老大なるものであるが、平易な解説は行文の平明と相俟つて讀者をして左程の倦怠を覺えしめないのみならず、會計學の參考書としては寧ろ肩の凝らない程度の氣樂さを以つて接することが出来るのは、恐らく油谷氏の口述筆記たるに依る意外の功名に歸すべきであらう。而して又本書の最も大きな特色とも云ふ可きは、『英米に學ぶこと十有餘年、其の間彼の地に於て會計、計算及び記帳の實務に従事し、……特に米國公認會計士及び米國會計士協會々員の諸氏に就いて直接に指導を受け、會計學と實務との關係を窺知するの機會を得、……又歸朝以來會計業務に従ひ』たりといふ油谷氏の貴重な經驗に基く該博なる實際的知識であらねばならぬ。従つて専ら計算記帳の實務に重きを置き、簿記係乃至會計士に對する實際上の注意を怠らざりし點に於て、本書は數多き我國の簿記會計書中に在つて最も異色あるもの、一たるを得ると同時に、就いて聽くべき部分の尠少に止まらざる好個の參考書として推すに足るものである。

今本書の内容を簡単に紹介するならば、先づ第一卷は之を「一般會計」と題して「單式簿記」と「複式簿記」との二篇に分ち簿記一般の説明を行ふと共に、帳簿の締切より順次資産の評價乃至損益計算書に關する解説等に及び一般に會計學の名を以つて呼ばるゝ分野を含ましむるのみならず、又卸制引及び現金割引、支拂期日平均、利息算並びに年金算の如き普通商業數學の中に於いて扱はるべ